

## 連符の技巧 その3

1<sup>er</sup> Mouvement

今回の譜例はフランス印象派音楽の傑作として名高いラベルの「亡き王女の為の帕ヴァーヌ」の一部です。非常に複雑な書法の為に、浄書ソフトを用いてこれを制作するのは難題と言えるでしょう。特に小節線を超える連符が多く見られるので、まずは、この作成法に習熟しなければなりません。こういった書法は必ずしも一般的ではありませんが、スペインのファリヤなども、この「侵略連符」を好んだ作曲家でした。

冒頭から2小節目にかけての右手部分の下声部と2小節目から3小節目にかけての左手部分の小節線超え連符については、これはそれほど難しくありません。この奇妙な連符は無視して、あらかじめ譜面の通りに素直に音符を入れておくのが第一手順です。次に、小節を超えさせたい音符を、わざと「どんな数の音符でも1小節に収める」という小節属性にはしないで、無理矢理入れるのが第二の手順。そして、道具箱の「音符移

動」を使ってそれを次の小節の同じ音符に確実に重ね、元々あった音符をHキーを使って隠せば完成です。ただし、冒頭から2小節目にかけての右手部分の上声部については、必ずしもこの方法に頼る必要はありません。連符を二つ共に水平にして、高さを合わせてから、どちらか、もしくは双方の連符を道具箱の「連符伸縮」で延ばせば事足ります。後々の編集も楽になりますから、可能な場合はこの方法を用いるべきでしょう。

頭を抱えたいくなるのは、改行された連符です。ここでは冒頭と最後の小節にそれらが有ります。冒頭の上声部は連符が続くので「連符伸縮」で実現できますが、その他のものはどうにもなりません。「音符移動」で動かしたところで、自動で改行してくれるほど Finale は優しくありません。何か奇抜な術が必要だと思い、数年前、この開発の為に何日も費やしたものでした。

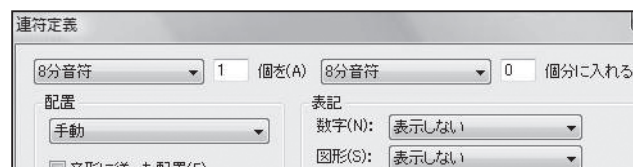


しばらく前のバージョンから搭載されているプラグインを使うと、右図のような設定になります。何と、「0 個分に入れる」です。ゼロ！。これは思いつきませんでした。この不条理の連符を入れてから普通の八分音符を入れるということですが、この方法なら二つの八分音符がピッタリ重なりますので、符頭と符尾を空白にする必要はなくなり、ただ「連符伸縮」のみの作業となります。

Finale の操作上で最も難しいものの一つが、この「小節を超える連符」です。しかし、この操作を完璧に、自動的に遂行してくれるプラグインがあり、「音符関連」の「パターン・プラグイン」に格納されています。これを使えば、特に仕組みが分からなくとも容易く作成できるのですが、便利な反面で落とし穴もあります。

後からアーティキュレーションのアイテムを入力する時が一例ですが、次の小節にあるように見える音符が、実は連符で繋がれた音符の冒頭と同じ小節内に詰め込まれたものであること。これを知らなければ、入力は出来ません。ただ、このパターン・プラグインには解除機能も付いていますから、一度解除してか

既に連符ツールの魔力に感服していた私は、左図の連符設定を思いつきました。これで拍数の整合性も保てます。段頭なら前の、段末なら後の八分音符の符頭と符尾を道具箱ツールを使って「空白」にすれば、欲しかった連符のみ手に入りますから、その後に「連符伸縮」で調節するという寸法です。



ら入力する手もありましょう。ただし、他のプラグインにはこれほどの完成度を持たないものが多く、やはり仕組みを理解してから使うべきものかとは思いますが。

それにしても「八分音符1個を八分音符0個分に入れる」とは何という発想か。プログラムを知り抜いた人のみができるような、連符ツールそのものの威力に勝るとも劣らぬ、実に見事なプラグインです。この作者のロバート・パターン氏はプロのホルン奏者でもあるそうですが、広い世の中にはとんでもない音楽家がいるものだ、これにも驚嘆するばかりです。